

若妻・寝取られ～あの人の奴隷にされました 5 (恥辱なる小説)



発売日: 2017年6月16日

出版: コータロー

著者: コータロー

ページ: 88

鬼畜な長年男の意のままに、凌辱の限りを尽くされる美しき若妻。
男に従順なメス奴隷として、過激な性調教を日々課せられる美しき少女。
血のつながらない二人の女は、自身に振りかかる境遇から想いを共にし、いつしか……
終わりなどあり得ない陰惨な性地獄は、さらに過激なものへと突き進む。

「くくくっ、そうですよ。綾音のアンダーヘアを耨り取らせてもらいます」

「す、するなら……しなさいよ。もう、覚悟はできているから」

「お、お願いします。黒田……いえ、ご主人様……綾音さんの代わりに、遥香のヘアを…
…オマンコの毛を抜いてください」

「遥香さん……どうして……？」

見つめる綾音の瞳が悲嘆にくれるなか、漆黒に色づくヘアが指の先に巻き取られていく。

総文字数 39083字（本文のみ）

シチュエーション

若妻凌辱・人妻寝取り・美少女凌辱・パイパン・アンダーヘア耨り取り・鞭打ち・巨大ディルドオナニー・浣腸責め

本作品は縦書きにて構成されています。

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。

<http://chijoku.red/>

【題名】

第1章 セックスと浣腸と媚薬と、蝕まれる白き裸体

第2章 排便地獄とセックスと

第3章 耨り取られる恥丘の鬨り

第4章 性人形として競り落とされるために

第5章 絶頂を目指して～貫かれる膣穴

第6章 呻る鞭先、ほとばしる悲鳴

【登場人物紹介】

木下綾音（きのした あやね）

B 8 4 - W 5 8 - H 8 6 二十五才

本作品のヒロインであり、結婚してまだ一年余りの若妻。
スタイル抜群な官能的なボディに、どこか愛くるしさを覗かせる美顔の持ち主でもある。
人妻らしいおしとやかで慎ましい性格。
夫を想い、自宅マンションで自慰に耽っていたところを智道に目撃され、それをネタに女の
肉体を……

皆川遥香（みながわ はるか）

B 7 8 - W 5 4 - H 8 0 十八才
智道が勤める水道工務店の社長令嬢である。
不況風が吹くなか、父親が経営する会社を支えようと、高校を卒業後は事務員として働いて
いる。
持ち前の明るさをバネに懸命にがんばっているが、そんな少女に卑劣な影が忍び寄り……

神山智道（かみやま ともみち）

水道工務店に勤める作業員。年齢は三十五才。
地方の高校を卒業後に都心の大学に進学。
しかし、折からの不況に煽られ、大学を出た後は派遣など様々な仕事を乗り継ぎ、現在は従
業員 5 人ほどの小さな工務店に身を置いている。
性欲は強く、時には強硬な手に打って出ること。

黒田（くろだ）

経歴、素性は謎の男である。
常に上下とも黒のスーツを着こみ、感情を窺えない冷たい眼差しは、見る者を怯えさせる。
遥香を呼び出しては、淫らな辱めを加えている。

木下和則（きのした かずのり）

綾音の夫である。
中堅どころの商事会社に勤務している。
結婚してまだ一年余りだが、勤めている会社の仕事に追われる余り、彼女との夜の営みは疎
遠に……

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

【作品サンプル】

第 1 章 セックスと浣腸と媚薬と、蝕まれる白き裸体

「ふう……はああ……智道さん、お願い……」

その声は、智道の目の前から聞こえた。

ふわっと空気が拡散する。

男を挟むように広げられていた細くてスラリとした両足が、宙に浮いた。

「遥香、早くセックスして欲しいから……うふふ、こんな格好をしちゃった」

つま先が瞬間的に天井を向いた。

ほんのちょっぴり静止し、そのまま滑らかに下降を開始する。

はにかんで見せるのに、堅い表情をする遥香の顔の麓へと。

「やだぁ、オ……オマンコが丸見えになっちゃった。ついでにお尻の孔まで……」

腰が折りたたまれていた。

腹筋と柔軟な肢体を兼ね備えた少女は、自らの力のみで女性器を露わにさせる、マングリ返しのポーズをこしらえていた。

「くくくっ……」

隣のベッドから、下衆な笑い声が漏れた。

「あああ……」

哀愁に染められた喘ぎも漏れた。

「智道さん……どっちの孔にする？ オマンコ？ お尻の方？ 遥香はどっちでも構わないわよ」

下半身が覆いかぶさり、内臓が圧迫されているのだ。

それを示すように、語りかける遥香の声には息苦しさが感じられる。

けれども少女は、はにかむ笑顔を崩そうとはしない。

まるで想いを寄せる恋人に語り掛けるように、男の名を呼んだ。

「ふくうっ」

喉に秘めさせた気合の呻きだけは本心である。

そして少女は、両手の肘関節で太腿の肉を押さえこみ、伸ばした腕の先を彼女自身の下腹部に乗せた。

右手の指が、乙女のスリットを割り開いている。

左手の指がさらに伸ばされ、なめらかに下る臀部の丸みへと。

閉じることも叶わず、くすんだピンクに色づけされた尻肉の谷間のアナルの扉に。

(遥香、お前……綾音を助けようと……)

ここで話しかければ野暮というものである。

いつのまにか、遥香の顔からはにかみが消えていた。

桜色の顔の肌を、湯だったように紅く染め直して、今にも泣きそうな表情を智道に送りつけているのだ。

「そうよね。わたしも遥香さんも、スケベなことをして欲しいメス犬だったわね。んんっ、くはぁ……こ、これで、どうかしら？」

熟した女の香りが拡散する。

遥香の下半身にうっすらと肉盛りさせたような、綾音の官能的な下半身も跳ねた。

寝そべったまま、腰の関節が折り曲げられている。

隣のベッドで、ハシタナイポーズを決める少女をなぞるように。

二十五才の若妻もまた、下腹部のすべてを曝け出したマングリの姿勢を自ら作った。

「どうぞ……好きなようにお使いください。綾音の……オマンコと、お尻の孔も……」

肉厚な女の割れ目が広げられる。

窄んではこっそりと開かせて、そんなアナルのすぼまりにも指先が立てられる。

「これは困りましたね。突き挿したくても、私の持ち物は一つしかありませんから。どうします？」

「どっちの穴かって……そんなの、アンタが好きを選んで入れればいいだけだろう」

可憐な女たちが、恥を忍んで痴態を見せつけているのだ。

それに男として報いるなら、焦らすことなく選択し、ペニスを突き立てるしか……

余りにもバカバカしい悩みを持ちかける黒田に、智道の心がイラついた。
「薬の方も、そろそろ効いてくるころですし……そうなると、こちらの穴へは……くくくっ
……」

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。
<http://chijoku.red/>

<https://k2s.cc/file/99ec7329d0afe/fLov02L0y.pdf.rar>